付篇Ⅱ

古墳時代における竪穴住居の各属性について

河　村　吉　行

1　はじめに

筆者は先に弥生時代社会の構成要素を抽出するにあたり、その一つの手段として県内における弥生時代の竪穴住居を大きく九つの水系単位に集約し、集落内において生産、消費の拠点となる個々の竪穴住居について平面形態、床面積、主柱数および主柱間床面積等の構造的属性から分析を行ない、各水系単位における住居構造の諸特徴の時期的変遷・画期について問題提起を行なった。[1] また、火災住居の検出例も少なく、建築学的立場からの構造力学的な分析は留保したが、平面的な視点から水系単位の竪穴住居の各属性の時期的変遷を概観した。本稿では古墳時代の竪穴住居の分析を試みるが、その前に、県内の弥生時代の竪穴住居について各属性の変化の過程・画期について簡単に触れておくことにする。

弥生時代の竪穴住居の平面形態の変化には時期的に二つの画期が認められた。第一の画期は前期末で、資料数は少ないが長門部の西部、木屋川流域に位置する坂ノ上遺跡、[2] 上原遺跡[3] および周防部西端、椹野川流域に位置する西遺跡[4] で方形から円形への形態変化が窺われる。第二の画期は固定的に採用された円形の平面形態に加え、方形のものが出現する中期後半の段階である。椹野川流域の山口大学構内遺跡（吉田遺跡）[5]、佐波川流域の大崎遺跡[6] および厚東川流域の北迫遺跡[7] では隅丸方形のものが出現するが、この時期は佐波川流域の各遺跡で見られるように円形15棟に対し方形は３棟で、棟数的にはまだ円形のものが圧倒的優勢を占める傾向がある。しかし、次第に方形住居の出現頻度が増加し、後期後半の段階では両形態の住居棟数は桔抗状態となり、長門部最西端の綾羅木川流域に位置する石原[8]・伊倉[9] 両遺跡ではすべて方形へと変化している。これに対して阿武川流域の突抜遺跡[10] はこの段階でも円形住居が優位を占め、保守的色彩が強い。また、この段階では周防部北部阿武川流域の突抜遺跡 DW－15に見られるような方形住居の一辺が胴張りとなり、円形住居の痕跡を残すものや同遺跡 DW－11、周防部北部にあたる末武川流域の宮原遺跡第１号住居跡[11] のような上面は円形に近いが床面が方形のものなどが存在し、円形から方形への過渡的な形態をもつものが出現する。

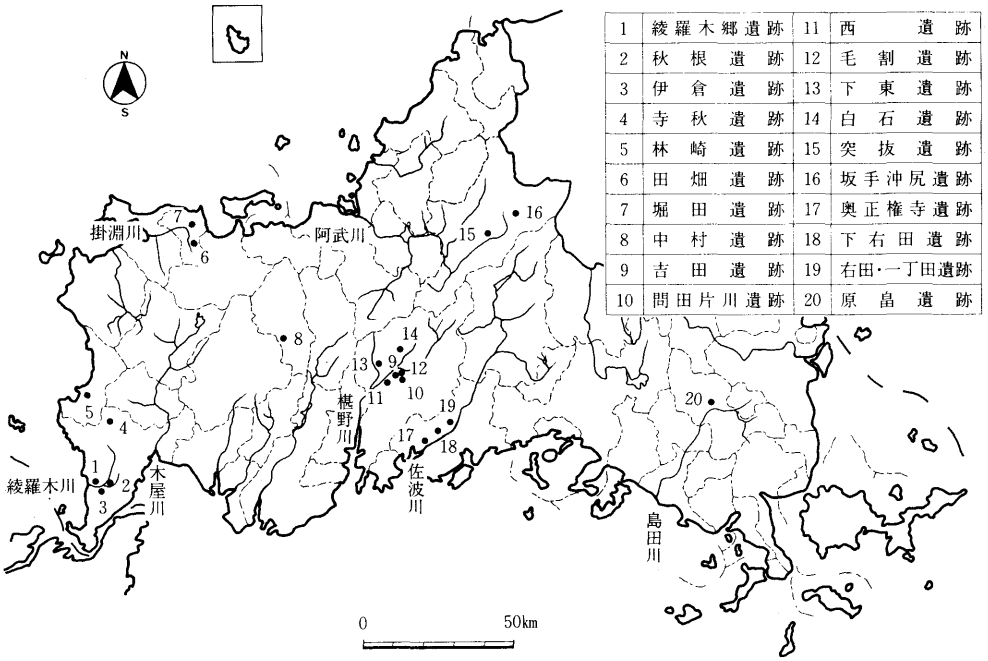
床面積は、前期末～中期初頭の段階では約30㎡を超えるものはないが、中期前半以降は

椹野川、佐波川、阿武川流域の各遺跡で顕著に見られるように、前代の規模を踏襲した約10～25㎡のものに加え、約40～65㎡と大形化した規模をもつものが出現する。住居規模の大形化のピークは円形住居に特徴的で、各流域とも方形住居が出現する時期に相当し、椹野川、佐波川流域では中期後半頃、阿武川流域では後期前半頃、掛淵川流域では後期後半頃である。各流域とも「倭国大乱」の緊張時にあたっており、戦闘に備えて集住を余儀なくされた結果、一棟ごとの収容面積の拡大を伴い、円形住居の盛行を導いたものと考えられている。[12] 規模の大形化の収束後は、方形住居は約10～30㎡、円形住居は約10～25㎡のものと約30～45㎡前後のやや大形の二群に分化する。方形住居は椹野川、佐波川流域でみられるように約10～20㎡前後に規格化するものが多い。他の流域に比較していちはやく後期後半の段階で綾羅木川流域では方形住居は約10～30㎡、約35㎡、約55～60㎡の三群に分化するが、30㎡前後に規格化するものが多く、同時期の阿武川流域での円形住居の規模の画一化と同一現象を示す。

主柱数は住居規模の大形化と呼応して増加し、大形化のピーク時が最多となる。各流域とも円形住居は最多時で７～９本のものがみられ２～６本のものも存在する。また、方形住居が優位を占める後期後半の段階で２～４本となる。方形住居は住居規模と無関係に２ないし４本の二種類の主柱配置がみられる。

主柱間床面積は円形の場合、約30㎡以下の床面積をもつものは各時期とも床面積の45％ないしはそれ以下が大半で、４～５本の主柱をもつ中期後半の佐波川流域の住居にとくに顕著にみられる。また、約35㎡以上の床面積をもつもののうち、床面積の50％を超えるものは炉あるいは中央穴の周囲に２ないし４本の支柱（棟持柱）を床面に配置する傾向が窺える。方形住居は主柱間床面積の床面積に占める割合は45％以下が大半で、約30㎡以下の床面積をもつ円形住居の割合と同じ傾向を示している。したがって、方形住居の主柱は約30㎡以下の床面積をもつ円形住居の空間分割を意識して配置されたものと考えられる。

こうした、竪穴住居の諸属性は集落の構成員はもとより、集落を形成する集団の生活・社会様式の主体的力量の反映であることから、以下では、弥生時代の竪穴住居で認められる諸属性が政治的・経済的・社会的な変動の画期となる古墳時代でどのように変化し、推移していったのかを検討してみたい。なお、畿内庄内式土器の時期区分については研究者相互によって編年観が異なるが、本稿で３世紀後半の年代を与えている。また、４世紀代の竪穴住居は現在のところ、綾羅木川流域の秋根遺跡 LS 004、[13] 椹野川流域の下東遺跡 KPD－１の２棟に限られており、[14] 竪穴住居跡の諸属性を分析するには資料数が少なく、資



1	綾羅木郷遺跡	11	西遺跡
2	秋根遺跡	12	毛割遺跡
3	伊倉遺跡	13	下東遺跡
4	寺秋遺跡	14	白石遺跡
5	林崎遺跡	15	突抜遺跡
6	田畑遺跡	16	坂手沖尻遺跡
7	堀田遺跡	17	奥正権寺遺跡
8	中村遺跡	18	下右田遺跡
9	吉田遺跡	19	右田・一丁田遺跡
10	問田片川遺跡	20	原畠遺跡

Fig. 90 県内における主な古墳時代の竪穴住居跡検出遺跡の分布

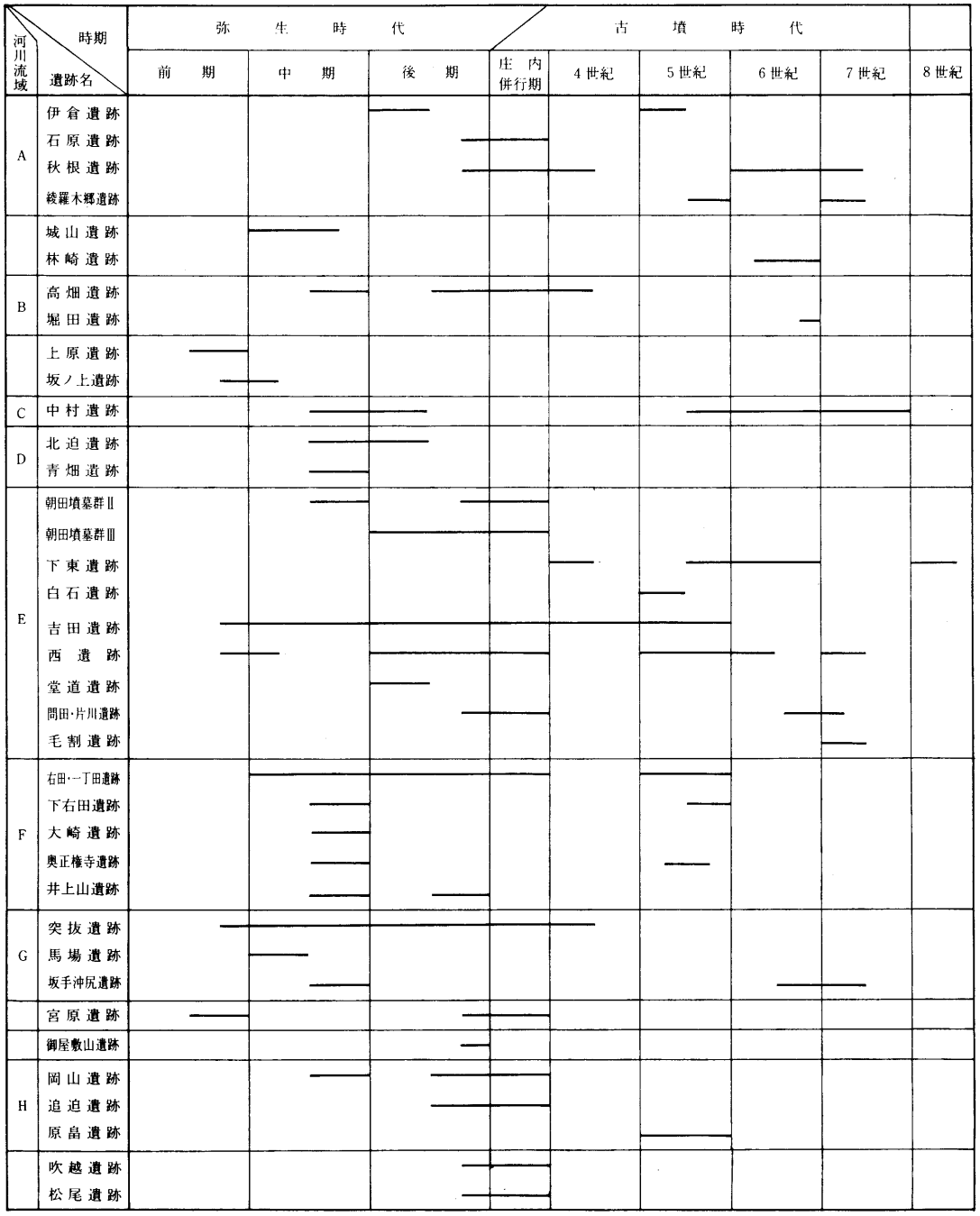
料数の増加を待って改めて言及したい。

2 竪穴住居の各属性

1）平面形態

弥生時代終末～3世紀代においては秋根、伊倉、石原遺跡等でみられるように綾羅木川流域では円形住居は消失し、いちはやく方形住居のみで構成されている。しかし、綾羅木川流域以外の六つの河川流域では、いずれも円・方両形態が混在しており、特に、阿武川流域の突抜・馬場遺跡、島田川流域の高地性集落と呼ばれる吹越[15]・松尾遺跡[16]等で顕著である。なお、円形から方形への過渡的な形態をもつものが先にも述べた突抜遺跡DW－11・15、佐波川流域の右田・一丁田遺跡第3・20号住居跡[17]や宮原遺跡第1号住居跡で認められることから、平面形態の変化は長門部に比べ周防部がやや遅れる傾向にあると言える。

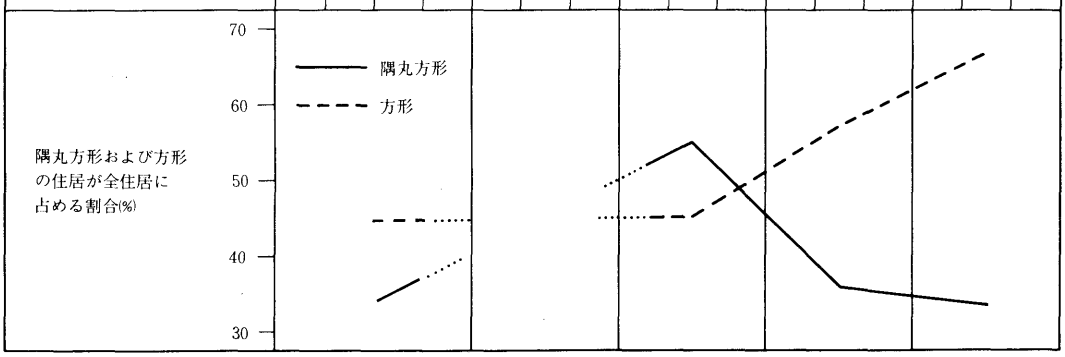
4世紀代の資料は、秋根遺跡LS 004の方形住居があげられるが、5世紀以降は各河川流域ともすべて方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の方形系統の住居で占められ、4世紀代、遅くとも5世紀には円形から方形の画一的な平面形態変化の画期が認められる。そこで弥生時代終末から7世紀にかけて時期別に、方形系統の各4種それぞれが全住居に占



（A：綾羅木川、B：掛淵川、C：厚東川、D：木屋川、 E：椹野川、F：佐波川、G：阿武川、H：島田川）

Fig. 91 県内における主な弥生～古墳時代の竪穴住居の時期

時期		弥生時代終末～3世紀				4世紀			5世紀			6世紀			7世紀		
平面形態		A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
河川流域	綾羅木川流域	4	14	2	5		1		2			5	1	1	3		
	掛淵川流域		1										3				
	厚東川流域												1		5	5	
	椹野川流域			2		1			4	6	1		3			11	
	佐波川流域	2	2						4	4							
	阿武川流域	2	1														
	末武川流域	2							1								
	島田川流域	4															
計		14	18	4	5	1	1	0	11	10	1	5	8	1	8	16	0



(A：隅丸方形　B：方形　C：隅丸長方形　D：長方形　　数値は棟数)

Fig. 92　竪穴住居の平面形態変化

める割合を算出してみた。試料数は101の竪穴住居であるが、各河川流域単位での検出事例に多寡があるため、あえて時期別に一括した。また、弥生時代終末～3世紀代に一辺あるいは二辺が胴張りとなり、円形から方形への過渡形態となるものは除外した。方形住居は弥生時代終末～3世紀代では全住居の43.9%、5世紀代で45.4%で5割に満たず出現比率はほぼ同じである。しかし、6世紀以降は次第に出現頻度を増し、6世紀代で全住居の57.1%、7世紀代で66.6%と全住居の7割弱を占めるようになる。また、隅丸方形のものは弥生時代終末～3世紀代で全住居の34.1%であるが、5世紀代には出現頻度が急増し、55.0%を占めるようになる。その後、6世紀代では全住居の35.7%、7世紀代で33.3%と

安定した出現率を示すようになる。すなわち、弥生時代終末～3世紀代には方形住居が優位を占めていたが、5世紀代には両者の出現頻度が逆転する。それとともに、長方形、隅丸長方形の検出例は少なくなる。しかし、6世紀以降は隅丸方形が逆に減少し、安定した出現率を示すのとは対照的に方形住居が次第に集落内で棟数を増し、7世紀代では全住居の7割弱を示すようになる。したがって、古墳時代の方形系統の住居の平面形態の画期は弥生時代ほどの大きな変化はないが、5～6世紀代に求めることができ、6世紀以降は住居の平面形態が方形という画一化した形態をとる傾向が指摘できる。

2）床面積

次に、各時期の床面積の推移をみてみることにする。

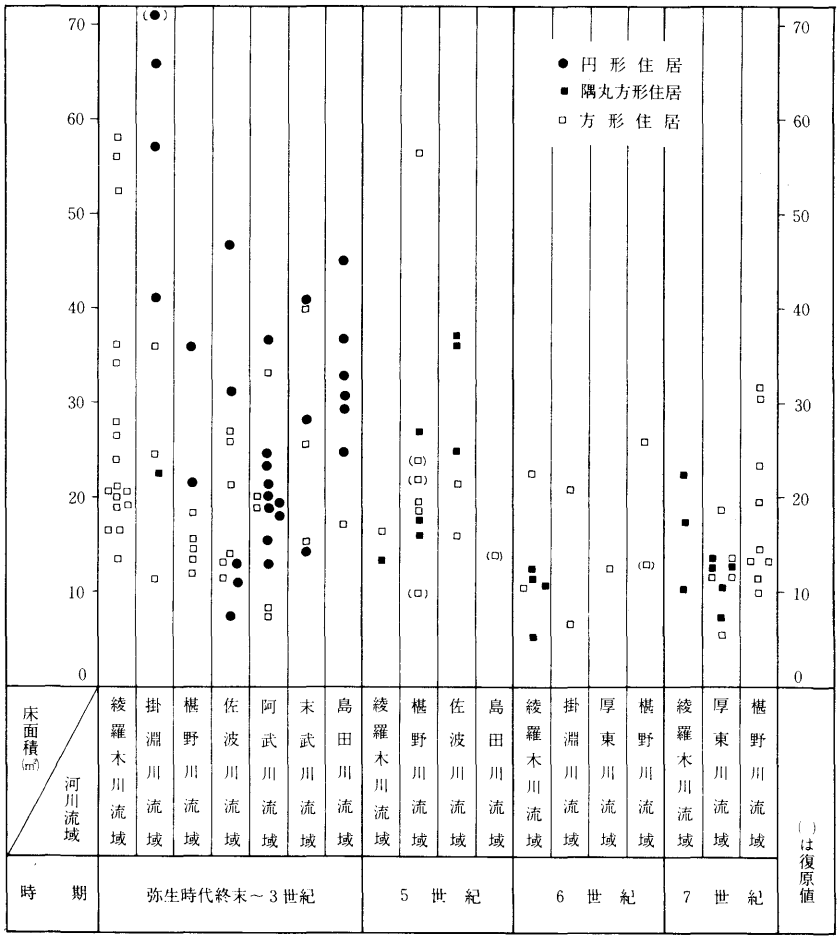


Fig. 93 竪穴住居の床面積

弥生時代終末～3世紀代における方形住居の床面積は大きく約10～30㎡、約30㎡、約50～60㎡の三群に区分されると考えられる。綾羅木川流域の秋根、伊倉、石原遺跡等ではとくに顕著に認められるが、各流域とも約10～30㎡前後に集中している。この傾向は5世紀代まで存続するが、6世紀代ではいっそう顕著となり、5世紀代でみられた右田・一丁田遺跡第2・19号住居跡や山口大学構内遺跡（吉田遺跡）の遺跡保存地区第13号竪穴住居跡[18]等の35㎡以上の床面積をもつ住居は姿を消し、床面積はすべて約10～30㎡前後に縮小化してしまう。この縮小化した住居はさらに約10～15㎡前後のもの、約20～30㎡前後のものの二群に分化している。とくに、7世紀代では厚東川流域の中村遺跡[19]、椹野川流域の毛割遺跡[20]にみられるように約10～15㎡前後の極めて画一化した床面積をもつ一群が出現している。

Tab. 10　竪穴住居の主柱数

時期＼主柱数	0	1	2	3	4
弥生時代終末～4世紀	1	0	9	0	10
	5.0		45.0		50.0
5世紀	3	0	7	0	8
	16.7		38.9		44.4
6世紀	3	0	1	0	8
	25.0		8.3		66.7
7世紀	4	2	2	2	13
	17.4	8.7	8.7	8.7	56.5

上段数値は住居数、下段数値は同時期の全住居に占める割合(%)

古墳時代における床面積変化の画期は以上のように住居規模の小形化・画一化として捉えられ、先に述べた平面形態が隅丸方形から方形に変化し、画一化する時期と同じく6世紀代に認められる。すなわち、平面形態の方形への規格化と床面積規模の小形化・画一化が連動しており、注意しておきたい。

3）主柱数

床面積が約10～25㎡前後のもので比較すると、円形住居は弥生時代中期後半では、佐波川流域の奥正権寺[21]、下右田[22]、右田・一丁田、井上山[23]各遺跡で2～6本とバラエティーに富むが、各流域で方形住居が定着した後期後半～3世紀代では0、2、4本の三種に限定される。この傾向は6世紀代まで引き継がれる。しかし、5世紀代までは4本柱と他の主柱数をもつ住居はほぼ同数に近いが6世紀代では2本柱が激減し、4本柱をもつものが他の主柱数をもつものに比べて約2倍近い出現率を示している。主柱数の変化においても、6世紀代がひとつの画期であることが推察される。また、7世紀代では1、3本の主柱をもつものが出現し、0～4本の五種の主柱をもつ住居が営まれている。

4）主柱間床面積

方形住居で主柱間床面積が床面積に占める割合は、変化の画期が5、7世紀代に認められる。弥生時代終末～4世紀代ではほぼ17～41％の範囲内に分散していたが、5世紀代では山口大学構内遺跡（吉田遺跡）の遺跡保存地区第13号竪穴住居跡、西遺跡第4・12号住居跡、下右田遺跡DW－2、右田・一丁田遺跡10号住居跡で22～26％、6世紀代では秋根遺跡3～6号住居跡、中村遺跡DW－20、下東遺跡KPD－7で21～31％である。5世紀代では前代にみられた分散傾向が収束し、ほぼ一定の占有率をもつようになり、住居内の空

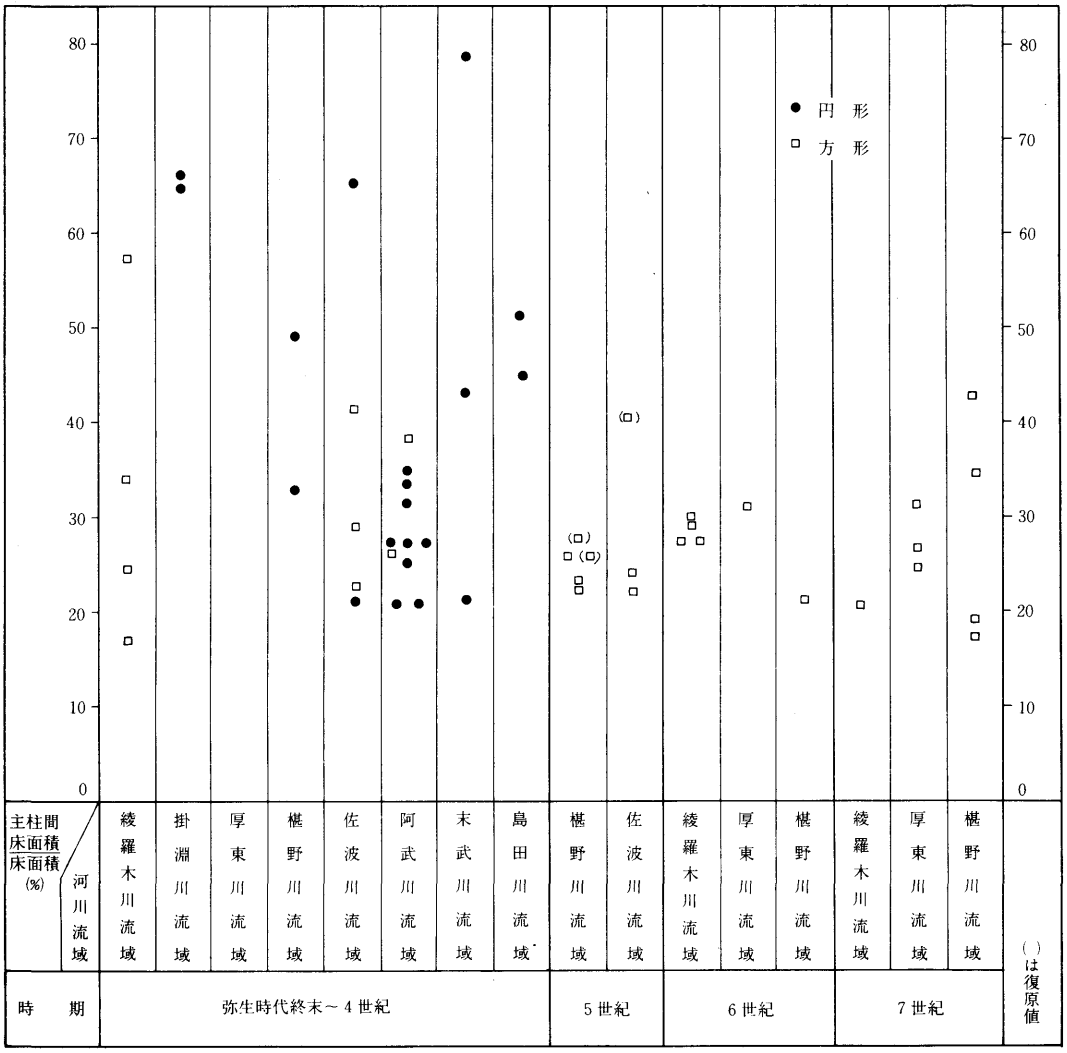


Fig. 94 床面積に占める主柱間床面積(1)

間分割意識が固定化したものと考えられ、6世紀代へも継続して営まれるようになる。しかし7世紀代では、秋根遺跡LS014、中村遺跡DW－17・23・30、毛割遺跡第8～10号住居跡で、17～42％の占有率をもつようになる。住居規模の拡大と主柱間床面積の拡大は必ずしも比例しておらず、各住居単位すなわち集落の構成単位で、独自に床面積に占める主柱間床面積の選択が行なわれたものと理解できる。

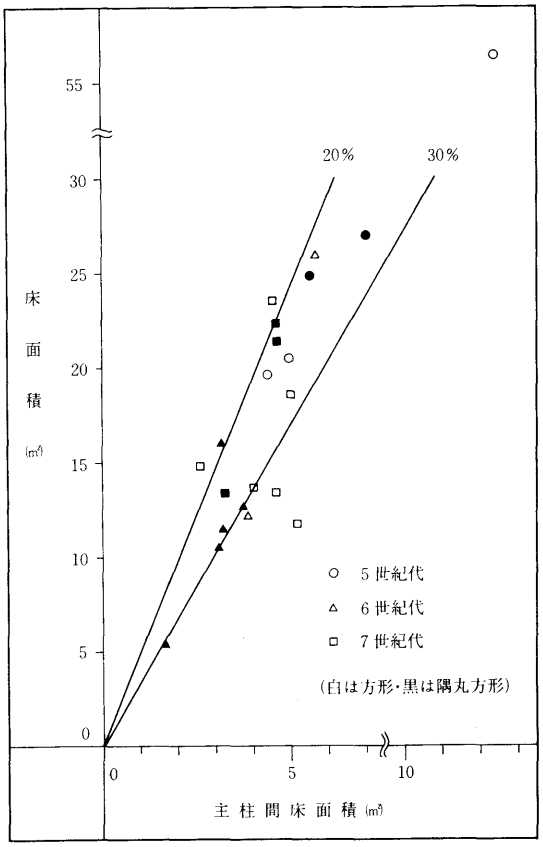


Fig. 95 床面積に占める主柱間床面積(2)

3 各属性の画期について

これまで述べてきたように、古墳時代における平面形態、床面積、主体数、主柱間床面積の各変化の画期は以下のように要約することができる。

平面形態は方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の四種に大別されるが、時期別にみると方形系統の全住居中に占める各形態の出現比率が異なっている。方形の平面形態をもつものは、弥生時代終末～5世紀代までは全住居棟数の5割に満たず、しかも安定した出現率を示している。逆に、隅丸方形のものは5世紀代に全住居棟数に占める割合がピークに達し、方形住居の棟数をしのぐようになる。しかし、隅丸方形の住居は6世紀以降7世紀まで全住居数の約3割強までに激減し、安定した出現率を示すようになる。この傾向と反比例するかのように6世紀以降は方形住居が次第に棟数を増し、隅丸方形の住居を棟数的にしのぐようになるとともに、7世紀には全住居数の7割を占めるようになり、各集落内で6世紀以降、住居の平面形態が方形に規格化される。

床面積は5世紀代までは約35㎡以上のやや大形の住居が存在するが、6世紀代にはすべて約10～30㎡前後の規模に縮小し、画一化する。とくに、7世紀代では数遺跡で約10～15㎡前後の極めて規格化した住居規模をもつ一群が出現し、住居規模の小形化、画一化が

進んでいる。

主柱数の変化もまた6世紀代にひとつの画期が想定される。5世紀代までは4本柱と他の主柱数をもつものはほぼ同数に近いが、6世紀代では4本柱のものが圧倒的に優勢で約2倍近い採用率を示す。

すなわち、古墳時代における住居の平面形態、床面積、主柱数の変化は画一化・規格化現象として把握することができ、その画期は6世紀代に認められることが明らかとなった。この画期をもたらす社会的要因のひとつに、時期を同じくして県内各地で造営された群集墳盛行の背後にある被葬者の質的変化があげられよう。弥生時代中期における平面形態の円形から方形への変化が、いわゆる「倭国乱」に代表される政治的緊張が契機となって、床面積の確保とそれに伴う収容人員の拡大となって具現したものと考えられており、政治的・社会的要請に規制された結果、引き起こされた現象であることもその傍証となろう。群集墳は「いくつかの家族が、家長の死を契機としてそれぞれ一世代一墳ずつ何世代かにわたって古墳を築造した結果累積したもの」[24]と考えられ、家族墓的色彩が強いものとされている。いくつかの家族とは住居数棟で一つのまとまりをもつ集団で「世帯共同体」と理解することができよう。規模、構造は多様であり、横穴墓もその範疇で捉えることができる。被葬対象は「地域あるいは集団によっては、家族体の中枢部分のすべて、あるいは家族体の成員のほとんどすべてが、横穴式石室または横穴に葬られることがあった」[25]と想定されている。また、福岡県行橋市竹並遺跡では埋葬された人骨数、年齢、性別などから、横穴墓の被葬者の性格が5世紀段階では特定の人々に限定されていたが、6世紀段階になると「一横穴墓への埋葬は傍系を含む夫婦単位を基調とした小家族で、それがいくつか集まった単位が家父長制的な世帯共同体をつくっている」とされ、それ以降は「一横穴墓への埋葬は直系の小家族のみとなり、細分されてくる」[26]と指摘している。6世紀代に認められる竪穴住居の各属性の画一化・規格化現象は、このような細分化した小家族に対応するもので、自立化しつつある家長を紐帯とした、小家族単位の新しい世帯共同体原理の反映と考えられよう。

なお、小論は昭和61年度文部省科学研究補助金（一般研究C）「防長における律令国家成立以前の集落構造の変遷と推移に関する研究」の研究成果の一部を含んでいる。

〔注〕

1）河村吉行「考察―弥生時代竪穴住居跡の各属性について―」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年)。
2）山口県教育委員会『坂ノ上遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第29集、1974年)。
3）冨士埜勇『上原遺跡』(菊川町教育委員会、1976年)。
4）山口市教育委員会『西遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
5）河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年)。
6）山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第82集、1985年)。
7）小野忠熙「北迫遺跡」(『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年)。
8）山口県教育委員会「石原遺跡」(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第17集、1973年)。
9）山口県教育委員会『伊倉遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第16集、1973年)。
10）山口県教育委員会『突抜・馬場遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第87集、1985年)。
11）山口県教育委員会「宮原遺跡」(『宮原遺跡・上広石遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第20集、1973年)。
12）都出比呂志「弥生時代の東と西」(『日本語・日本文化研究論集』、大阪大学文学部、1984年)。
13）下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977年)。
14）建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『下東遺跡・荻峠遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。
15）a　小野忠熙他『吹越遺跡予備調査概報』(平生町教育委員会、1970年)。
　　b　小野忠熙他『吹越遺跡第二次調査概報』(平生町教育委員会・山口県教育委員会、1972年)。
16）山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」(『西部瀬戸内における弥生文化の研究』、山口大学人文学部考古学研究室研究報告第３集、1984年)。
17）山口県教育委員会「右田・一丁田遺跡」(『右田・一丁田遺跡、的場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第19集、1973年)。
18）河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1987年)。
19）財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会『中村遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第100集、1987年)。
20）山口市教育委員会・道川重機株式会社『毛割遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第18集、1983年)。
21）山口県教育委員会・山陽工業株式会社『奥正権寺遺跡Ⅰ』(山口県埋蔵文化財調査報告第77集、1984年)。
22）a　山口県教育委員会編『下右田遺跡第１・２次調査概報』(山口県埋蔵文化財調査報告第43集、1978年)。
　　b　山口県教育委員会編『下右田遺跡第３次調査概報』(山口県埋蔵文化財調査報告第46集、1979年)。
23）井上山遺跡発掘調査団『井上山遺跡』(1979年)。
24）白石太一郎「日本古墳文化論」(『講座日本歴史１』、東京大学出版会、1984年)。
25）近藤義郎「弥生文化論」『前方後円墳の時代』、岩波書店、1983年)。
26）竹並遺跡調査会編『竹並遺跡』(寧楽社、1979年)。

〔文献〕

Tab. 11　県内の主な古墳時代の竪穴住居一覧表は以下の文献によって作成した。

1）下関市教育委員会『綾羅木郷遺跡発掘調査報告第1集』(1981年)。
2）山口県教育委員会「秋根遺跡」(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第17集、1973年)。
3）下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977年)。
4）山口県教育委員会『伊倉遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第16集、1973年)。
5）山口県教育委員会「寺秋遺跡」(『寺秋遺跡・湯免遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第47集、1979年)。
6）豊浦町教育委員会・山本昌美『林崎遺跡』(1987年)。
7）㈶山口県教育財団・山口県教育委員会『たかはた』(山口県埋蔵文化財調査報告第94集、1986年)。
8）前田勲「原史・古代の日置」(『日置町史』、日置町史編纂委員会、日置町、1983年)。
9）財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会『中村遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第100集、1987年)。
10）山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区発掘調査概報』(山口大学、1971年)。
11）本書付篇Ⅰ参照。
12）山口市教育委員会・株式会社林兼商会『問田片川遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第20集、1985年)。
13）山口市教育委員会『西遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
14）山口市教育委員会・道川重機株式会社『毛割遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第18集、1983年)。
15）建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『下東遺跡・荻峠遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。
16）森田孝一「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
17）山口県教育委員会『突抜・馬場遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第87集、1985年)。
18）山口県教育委員会「坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第42集、1978年)。
19）山口県教育委員会・山陽工業株式会社『奥正権寺遺跡Ⅰ』(山口県埋蔵文化財調査報告第77集、1984年)。
20）山口県教育委員会編『下右田遺跡第3次調査概報』(山口県埋蔵文化財調査報告第46集、1979年)。
21）山口県教育委員会「右田・一丁田遺跡、的場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第19集、1973年)。
22）山口県教育委員会「原畠遺跡」(『臼田・原畠・新畑遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第21集、1973年)。

Tab. 11 県内の主な古墳時代の竪穴住居一覧表

(1988年3月現在まで)

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	規模(cm) 深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
綾羅木郷遺跡	住居跡1号	5世紀後半	隅丸方	410	380	25	13.2			0	○	×	北壁中央	×	東壁、北壁東半部には壁溝なし。滑石製模造品、鉄鏃出土。	1
	住居跡2号	古墳時代	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
	住居跡3号	7世紀前半	隅丸方	460	410	15	17.8			0	×	×	北壁中央	×		
	住居跡4号	7世紀前半	隅丸方	360	320	30	10.5			0	×	×	北壁中央	×		
秋根遺跡	1号住居跡	6世紀後半	方	340	310	5	10.2			?	×	×	北壁中央	×	南壁胴張り。	2
	2号住居跡	6世紀後半	隅丸方	250	290	10	7.4+α			3(4)	○	×	北壁中央	土製	竈材は粘土。	
	3号住居跡	6世紀後半	隅丸方	375	345	8	10.5	3.2	30.48	4	○	×	北壁中央	×	北・西二辺に壁溝。	
	4号住居跡	6世紀後半	隅丸方	406	389	28	11.5	3.2	27.83	4	○	×	北壁中央	土製	竈材は粘土。南東のコーナーには壁溝なし。	
	5号住居跡	6世紀後半	隅丸方	335	295	15	5.6	1.5	26.79	4	○	×	?	?	幅広の壁溝	
	6号住居跡	6世紀後半	隅丸方	415	400+α	20	12.7	3.7	29.13	4	○	×	北壁中央	×		
	7号住居跡	6世紀後半	?	?	?	?	?	?	?	?	×	×	北壁	×		
	LS001	6世紀	(方)	320	290+α	24	7.5+α	4.1		4	○	×	?	?	北壁中央に住居外への張り出し。	3
	LS002	6世紀	(方)	420	190+α	11				?	○	×	?	?		
	LS004	4世紀末~5世紀前半	方	450	430	18	16.1			2	○	×	南壁中央	×		
	LS011	6世紀	隅丸長方	420	340	15	13.2			2	○	中央	×	×	壁溝は西壁のみ。北東隅に土壙。炉は中央穴の可能性あり。	
	LS014	7世紀前半	隅丸方	580	540	20	22.4	4.7	20.98	4	○	中央	×	×	炉は中央穴の可能性あり。	
伊倉遺跡	D区 1号住居跡	5世紀前半	隅丸方	610	590+α	30	(35)			2(4)	○	×	×	×		4

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
寺秋遺跡	1号住居跡	古墳時代	隅丸長方	230	180	10				1	×	×	?	?	床面中央部から東壁に焼土。住居外の各コーナーに柱穴。	5
林崎遺跡	S B 1	6世紀中葉～後半	隅丸方	483	395	10				3(4)	○	×	?	?	手捏ね土器。	6
	S B 2	6世紀中葉～後半	隅丸方	380	344	16	10.3	3.0	29.13	4	○	×	?	?	粘り床。北壁中央部床面に焼土、炭層あり。竈の可能性。	
高畑遺跡	2号住居	3～4世紀	楕円形	(1060)	(930)	15	(71)			6(7)	○	×	×	×	床面中央に焼土。中央穴挟んで2柱穴。ガラス小玉、勾玉。	7
堀田遺跡	1号住居跡	(6世紀末)	(方)	360						?	○	?	?	?		8
	2号住居跡	6世紀末	方	322	262	(10)	6.9			0	○	?	?	×	住居外へ延びる溝。	
	3号住居跡	(6世紀末)	方	310	310	20	21.5			0	○	?	?	×	壁溝は南壁、東・西壁南端部を欠く。	
中村遺跡	DW － 16	7世紀後半	方	390	354	19	11.9			4	×	×	西壁中央	×	貼り床。銅鉱石出土。	9
	DW － 17	7世紀後半	方	464	446	14	18.7	5.0	26.74	4	×	×	北壁東寄	×	貼り床。	
	DW － 18	7世紀後半	隅丸方	312	274	21	7.6			1	×	×	北壁東寄	×	貼り床。	
	DW － 19	6～7世紀	隅丸方	486	440	19	19.6			?	×	×	西壁南寄	×		
	DW － 20	6世紀	方	397	356	12	12.5	3.9	31.20	4	×	×	北壁中央	石製		
	DW － 21	7世紀	隅丸方	394	332	22	10.6			2	×	×	西壁北寄	×	貼り床。	
	DW － 22	7世紀後半	隅丸方	392	376	22	12.6			3(4)	×	×	西壁中央	×	壁面に沿って各辺二柱穴。北壁の竈を移設。銅鉱石、模造鏡。	
	DW － 23	7世紀後半	隅丸方	392	386	25	13.4	3.2	23.88	4	×	×	西壁中央	×	竈脇に土壙。貼り床。銅鉱石、土製模造鏡出土。	
	DW － 24	7世紀後半	方	390	332	11	11.9			4	×	×	西壁中央	石製	手捏ね土器、鉄刀子出土。	
	DW － 25	7世紀後半	方	260	246	16	5.7			?	×	×	北壁西寄	×	貼り床。土製紡錘車出土。	
	DW － 26	6～7世紀後半	方	408	348	20	12.6	5.7	45.24	4	×	×	西壁北寄	×	銅鉱石、銅塊出土。	
	DW － 27	7世紀	隅丸方	396	382	15	12.7			?	×	×	北壁中央	×		

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	規模(cm) 深さ	床面積(m²)	主柱間床面積(m²)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
中村遺跡	DW − 28	6～7世紀	隅丸方	316	312	20	7.7			?	×	×	北壁東寄	×	竈脇に粘土塊。	9
	DW − 29	5世紀後半～6世紀代	方	364	336	13	10.5			?	×	×	西壁中央	石製	竈撤去に伴う祭祀。手捏ね土器出土。	
	DW − 30	7世紀後半	方	384	336	18	13.8	4.0	28.99	4	×	×	西壁中央	×		
	DW − 31	6～7世紀	隅丸方	316	308	12	10.7			?	×	×	西壁中央	×		
山口大学構内遺跡	第1号住居跡	古墳時代前期	方	344	324	4	(14)			3	○	?	?	?	壁溝は西壁、北壁西端部のみ。北壁中央部西寄り床面に焼土。	
N.O-15区	第2号住居跡	古墳時代前期	方	418	388	30	14.5			3(4)	○	×	東壁中央	×	東壁中央床面に焼土。鉄塊、手捏ね土器出土。	10
	第3住居跡	古墳時代前期	隅丸方	560	512	25	(30)			3(4)	○	?	×	×	壁溝は西壁欠。北端部床面に焼土。北壁中央部、竈の可能性。	
	第4住居跡	古墳時代前期	長方	564	372	25	(20)			2	○	×	?	?	火災住居。鉄鎌出土。	
	第5住居跡	古墳時代前期	(方)	436+α	136+α	12				?	?	?	?	?		
	第6住居跡	古墳時代前期	(長方)	660	250+α	10				?	×	×	北壁中央	×	竈脇に土壙。	
遺跡保存地区	第12号住居跡	5世紀後半	隅丸長方	515	410	15	18.2			0	×	中央	×	×	住居外への張り出し。床面に壇状の平坦面。	11
	第13号住居跡	5世紀後半	方	764	720	4	56.6	12.4	21.93	4	○	中央東壁	×	×	火災住居。ベッド状遺構。	
問田片川遺跡	第10号住居跡	6世紀末～7世紀前半	(長方)	520+α	380+α	12				3(4)	×	×	北壁	×		12
	第11号住居跡	(6世紀末～7世紀前半)	方	300	140+α	10				?	×	×	?	?		
西遺跡	第1号住居跡	不明	(隅丸方)								×	?	?	?		13
	第2号住居跡	不明	隅丸方	378		10				1(2)	○	?	?	?		
	第3号住居跡	5世紀末～6世紀初頭	方	300	290	12	8.5			1	○	×	?	?	壁溝は北部コーナーのみ。北壁中央部付近に竈の可能性。	
	第4号住居跡	5世紀末	隅丸方	580	524	16	27.0	7.0	25.93	4	○	×	×	×	北壁に壁溝なし。南・西側の床面に壇状のテラス。	
	第5号住居跡	5世紀前半	隅丸方	484	426	5	(20)			2	×	?	?	?	北壁寄りの床面に焼土。	

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
西遺跡	第6号住居跡	7世紀前半	方	380	310	8	10.0			?	×	×	?	?	東壁中央部付近に竈の可能性。	13
	第7号住居跡	不明	隅丸方	562		10				2(4)	○	?	?	?	壁溝は東部コーナーのみ。	
	第8号住居跡	不明	方	238	234	6	(5)			0	×	×	×	×		
	第9号住居跡	5世紀前半	隅丸方	400	336	7	16.0			0	×	×	×	×	北壁は胴張り。手捏ね鉢形土器。	
	第10号住居跡	5世紀前半	方	493	400+α	4	(24)	6.2	(25.8)	4	×	×	?	?	滑石製模造品。	
	第11号住居跡	6世紀前半	方	374	340	6	(13)			0	×	×	×	×		
	第12号住居跡	5世紀中葉~後半	方	516	460	24	19.7	4.4	22.34	4	○	×	×	×	多量の滑石製模造品。	
	第13号住居跡	5世紀中葉以前	方	350	275+α	25	(10)			2	○	中央	×	×		
	第15号住居跡	不明	隅丸方	496	454	8	(22)			4	×	×	×	×		
	第18号住居跡	不明	隅丸方	480	386	8	(18)			2	○	×	×	×		
	第19号住居跡	5世紀後半以前	方	586	500+α	4	(35)	9.7	(27.7)	4	○	×	×	×	壁溝は西側の一部を欠く。	
	第20号住居跡	5世紀後半	隅丸方	464	436	14	18.0			2	×	×	×	×	南側コーナーに帯状の高まり。	
	第21号住居跡	不明	隅丸方	304	284	5	(8)			4	×	×	×	×	床面中央に焼土。	
毛割遺跡	第1号住居跡	7世紀前半	(方)	409	115+α	16				2	×	×	西壁北端	石製	竈は焚口両側に板石樹立、他の袖部は土。	14
	第2号住居跡	7世紀前半	(方)	375	180+α	20				0	×	×	西壁中央	×	張り床。竈は焚口両側に板石樹立、他の袖部は土。	
	第3号住居跡	7世紀前半	方	400	391	10	13.5			3	○	×	北壁中央	×	壁溝は西壁のみ。	
	第4号住居跡	7世紀前半	(方)	376	170+α	16				1	○	×	北壁中央	×	張り床。	
	第5号住居跡	7世紀前半	(方)	550	450+α	38				4	○	×	西壁中央	石製	鉄鎌出土。	
	第6号住居跡	7世紀前半	(方)	526	270+α	39				2(4)	×	×	北壁西寄	×		

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
毛割遺跡	第7号住居跡	7世紀前半	(方)	518	290+α	24				(4)	×	×	北壁中央	石製	滑石製模造品出土。	14
	第8号住居跡	7世紀前半	方	403	380	7	13.4	4.6	34.33	4	×	×	北壁中央	×	平面形態は台形に近い。張り床。周壁の切りこみのない竈。	
	第9号住居跡	7世紀前半	方	443	334	20	14.8	2.6	17.57	4	○	×	北壁中央	石製	壁溝は北壁西半部。竈は両袖に板石樹立後、山土で被覆。	
	第10号住居跡	7世紀前半	方	520	438	18	23.5	4.5	19.15	4	×	×	北壁中央	石製	第9号住居跡と二辺を共有。耳環出土。	
	第11号住居跡	7世紀前半	方	618	516	16	31.7			2～3	×	×	北壁中央	石製	竈は両袖に板石樹立後、山土で被覆。鉄刀子出土。	
	第12号住居跡	7世紀前半	方	646	494	16	30.8			0	○	×	西壁南寄	×	平面形態は台形状。壁溝は北壁・東壁北半部。耳環出土。	
	第13号住居跡	7世紀前半	(方)	504	260+α	17		5.3		4	×	×	北壁中央	石製	ベッド状遺構。製塩土器出土。	
	第14号住居跡	7世紀前半	方	400	340+α	28				3	○	×	北壁東寄	×	壁溝は西壁、南・北壁西半部のみ。製塩土器、勾玉出土。	
	第15号住居跡	7世紀前半	(方)	388	250+α	20				?	×	×	北壁中央	×	耳環出土。	
	第16号住居跡	7世紀前半	(方)	340+α	230+α	14		4.3		4	×	×	北壁中央	×		
	第17号住居跡	(7世紀前半)	(方)	460	100+α	24				0	×	×	?	?		
	第18号住居跡	(7世紀前半)	方	448	170+α	28		6.1		4	×	×	?	?	西壁中央部に竈の可能性。	
	第19号住居跡	(7世紀前半)	方	490	406	4	19.7			?	×	×	×	×	平面形態は台形に近い。	
	第20号住居跡	7世紀前半	方	394	340	10	11.9	5.1	42.86	4	×	×	×	×	床面に不整形な掘り込み。	
下東遺跡	KPD − 1	4世紀前半	隅丸方	375	315+α	0	10.1+α			?	○	×	×	×	北西コーナーに土壙。	15
	KPD − 2	5世紀後半以降	方	510	440	?	(22)			2	○	×	×	×		
	KPD − 3	6世紀後半	方	520+α	480	15	25+α			0	×	?	?	?		
	KPD − 4	5世紀末	(方)	(480)	440+α	8	16+α			?	○	?	?	?	張り床。	
	KPD − 5	?	方	435	374	5	(15.3)			2	○	×	×	×	出土遺物なし。	

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(m²)	主柱間床面積(m²)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
下東遺跡	KPD − 6	?	(方)	324+α	228+α	14				?	○	?	?	?	出土遺物なし。	15
	KPD − 7	6世紀前半	方	575	555	15	26.0	5.5	21.15	4	○	×	×	×	張り床。	
	KPD − 8	8世紀前半	(隅丸方)	360	284+α	20	8.3+α			?	×	×	?	?	未完掘。	
白石遺跡	竪穴住居跡	4世紀末〜5世紀前半	方	(400)		20				?	×	?	北壁	×	未完掘。	16
突抜遺跡	DW − 25	古墳時代初頭	方	300	290	30	7.0	1.9	27.14	4	×	×	×	×		17
坂手沖尻遺跡	3号住居跡	6世紀後半〜7世紀前半	方	350	310	10	11.0			2	×	×	北壁中央	×	南壁中央部に接して床面に土壙。	18
	4号住居跡	6世紀後半〜7世紀前半	方	365	310	12	12.0			2	×	×	北壁中央	×	南壁中央部に接して床面に土壙。	
奥正権寺遺跡	第4号竪穴住居跡	5世紀中葉	隅丸方	510	480	31	(21)	8.5	(40.5)	4	×	×	×	×	屋内土壙。	19
	第5号竪穴住居跡	5世紀中葉	(方)			25				?	×	×	×	×		
	第6号竪穴住居跡	5世紀中葉	方	620	610	38	(35)			?	×	×	×	×		
	第7号竪穴住居跡	古墳時代	隅丸方	320	270	16	8.5			0	×	×	×	×		
	第8号竪穴住居跡	古墳時代	隅丸方	460	430	13	19			?	×	×	×	×		
下右田遺跡	DW − 2	5世紀後半	方	530	480	20	20.6	5.0	24.27	4	×	×	北壁中央	×		20
	DW − 3	5世紀後半	方	430	390	10	16			2	×	×	東壁東南壁	×	火災住居。	
右田・一丁田遺跡〈一丁田地区〉	2号住居跡	5世紀後半	隅丸方	600		12	36.0			?	×	西壁寄	×	×	勾玉出土。	21
	3号住居跡	5世紀前半	方	520		10	(27.0)			2	○	×	×	×	壁溝は北壁のみ。	
	10号住居跡	5世紀後半	隅丸方	500	490	10	25.0	5.5	22.00	4	×	×	×	×		
	19号住居跡	5世紀中葉	隅丸方	690		22	37.0			2	×	×	×	×		
原畠遺跡	竪穴住居跡	5世紀	隅丸方	(390)	(340)	40	(14)			(4)	×	?	?	?	住居の周囲を巡る9柱穴。	22